

# マジカル八極拳月音

真っ白いなにか

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

麻婆神父に八極拳を教えて貰った月音は、高校受験に失敗して陽海学園に麻婆神父の命令で入る事に

これは、月音が八極拳を使って学園無双するお話です。

# 目次

プロローグ	1
学園のバンパイア	4



「ちよつと待てなんだよこころこころ」

そこは、閑散としており時折遠くで遠雷が鳴り積石の横には何かの動物の頭蓋骨があったり、

枯れた木の上では、漆黒のカラスがギャーギャー鳴いている場所だった。

「うっ……うそだろう何て気味悪い所だ……！トンネル入る前とは、まるで別世界じゃねエか」

すると、先のバスの運転手の言葉を思い出した。

”陽海学園は恐ろしい学校だぞ”

こえくくく

マジこえくく

麻婆神父より怖くないけど

帰りたくなってきた。

「あつ……あれが、学校かな。まるでオバケ屋敷じゃねエか！帰ろう！もういいから帰ろう！やっぱり麻婆神父頼ったオレが間違ってた！」

帰る事を決意していると後ろから女の子の声が聞こえてきた。

「きゃあー危ないっ」

キキーツ

「どいてー」

後ろを振り向くと女の子が自転車に乗って突っ込んで来ている。

「!!うわー」

ガシャーン

そのまま避ける事も出来ずに女の子（自転車）とぶつかってしまった。

「うっ……痛たた……自転車がつつこんできた!!?」

オレは立とうと手を伸ばすとふにつと何か柔らかいモノを掴んだ。

「……う……ごめんなさい……貧血で眩暈がしちゃって……だ……大丈夫でした?」

うわっこっこれは、かわいいーツ

こんなかわいいコ

見た事ねエぞーっ

こんなコいるなら麻婆神父に言われてきたこの学校来てよかったかよ。

「フトモモさわっちゃった」

その事を認識したら鼻血が出てしまった。

「あつ大変血がっ……」

すると女の子がハンカチを持って近づいて来た。

「あ……血の……香り、いつ……いけない私……」

そう言うとき女の子は、コツチにしなだれかかっていた。

「この香りかぐとおかしくなっちゃうの」

「うわーっ」

何だ!!?

これは一体ッ

「ご……ごめんねだつて……だつて私」

「バンパイアなんだもん」

そう言うとき、女の子はオレの首に牙を突き立てて血を吸い始めた。

バンパイアアアー!!?

「ぎゃあああああ」

「血を吸われた！いきなり血を吸われた!!？」

「ごっごめんなさい私は赤夜萌香」

「こう見えてもバンパイアなんです」

これがオレ青野月音と彼女、赤夜萌香の出会いであった。

## 学園のバンパイア

学園のバンパイア

「バンパイアー!!?あの十字架とかニンニクが嫌いな吸血鬼の!!?」

「はい。ごちそうさまです。あなたの血つてすごくおいしいんですね」

女の子、赤夜萌香さんがそんな事を言っている間にも噛まれた首からは、血が噴水の様に出ていた。

「あ・・・あの・・・やっぱ嫌いですかバンパイアなんて」

「え?いついや、いいんじゃないかな!バンパイアなんて個性的で!あはは」

混乱してて自分でも何言っているか分からないまま返事をしていた。

「よかった!こんな私でよかったら友達になって下さい!」

うわ、やっぱりかわいい。

「あ・・・オレ。青野月音です。よろしく・・・」

「よろしくお願いします。入学式終わったらまたお話しして下さいね」

入学式が終わって自分のクラス1の3に来ていた。

でもバンパイアって一体・・・

考え事をしてしていると担任の先生がやって来た。

「えーみなさん陽海学園によろこそつ。私は、このクラスの担任になった、猫目静です。みなさんもう知ってると思いますが・・・うちには妖怪が通うための学校です!」

えっ?えっ?先生何言ってるの妖怪えっ?

やっぱりあの麻婆神父様でもない所紹介しやがった。

「現在!もはや地球は人間の支配下にあります!私達妖怪が生きのびていくためには、人間と共存していくしかありません。この学園では、その『人間との共存のしかた』を学んでいきまーす!そのため校則としてみなさん、この学園では人間の姿で生活してもらいます!いいですか?上手く人間にばけられること!これが共存の基本で

す。自分の「正体」を他の生徒に知られたりしちやダメですよ」

と先生が説明し終わると如何にも不良ですつとといった感じの生徒が過激な事を言った。

「センセエ〜人間なんてみんな喰っちまえばいいだろ、美女なら襲えばいいし」

やべえ〜よ。この学園やべえ〜よ。

あのバスの運転手が言ってた通り恐ろしい学校だよ！

「あ、ちなみにうちには先生も生徒もみ〜んな妖怪ですよ！純粋な人間はいません！ここは秘密の「結界」の中の学園ですからね！こここの存在を知った人間には、死んでもらってます。なーんて」

「二「あははは二二」

オレ正体バレたら殺される!!?

やべえ〜よここから早く逃げないと。

浪人とかもどうでもいいよ命の方が大切だよ。

よし帰ろうそうしよう。

ガラツ

「すつ．．．すみませんっ。入学式の後校舎に迷ってしまつて．．．遅れました」

「あら大丈夫よ空いている席に座つて」

「はーい」

「だつ誰だあれ。なつ．．．何てサラサラの髪．．．！大きな瞳。うっ

美しい．．．変化なしでもあんなに美しくなれる奴なんていないぞ．．．

「美しいッ美しすぎるッこんなコと一緒にのクラスになれるなんて幸せだアー!!!」

教室に遅に入ってきたのは、今朝会つたばかりの赤夜萌香さんその人だった。

「．．．モ、モカさん．．．」

「あれ？つくね．．．?」

モカさんがそう言うとおレの方に抱きついてきた。

「つくねだあ！同じクラスだったの!?!うれしいー」

「うわ〜」



「何イいゝ何だあいつあのコとどんな関係なんだ!!?」

「美女が美女が」

「・・・へえゝ」

その時一人の生徒が興味深かそうにコチラを見ていることにこの時のオレは気付く事が出来なかった。

な・・・何だコレ。夢だ今日はまるで夢の中にいるみたいだ。毎日麻婆神父に扱かれていた日々からは想像出来ない。この夢から覚めない事を祈ろう。

「ねえねえ、すごい廊下だねー」

「う、うんそーだね」

「あつちも見てみよーよ」

ヤバイテンパリすぎて上手く返せない。

落ち着くために周囲を見てみるとそこには、ぼう然とした生徒達がいた。

「・・・うわっおい見たか今のコ」

「えっ何」

「ほら見ろよあのコだよあのコ」

そう言いながらモカさんの方を指さしていた。

「うわっ美しいッあんな美少女見たことねエぞっ」

「つつ・・・つきあいてえっ・・・!」

八極拳を習って敏感に成った感覚が今ものすごい殺気を感じていた。

「隣の男の子はなんだよコラ・・・」

「知るかどけッ」

「どかねエと殺すぞテメエ」

「殺すぞッ」

ヤバイあの殺気はマジだ。オレ殺されるかも・・・。

と考えていると教室で過激な発言をしていた生徒が前からやって来た。

「へえゝやっぱかわいいなくあんた赤夜萌香っていうんだってな。オ

レ同じクラスの小宮碎蔵！よろしく！ところで、何であんたみたいな美人がこんな男と仲良くしてんだ？」

小宮はそう言いながら、オレの襟首を掴もうとしてきたのでさり気なく避ける。

すると、中途半端に手を伸ばしたままの小宮は舌打ちをして手を引つ込めた。

「碎蔵だ！あいつあの小宮碎蔵だよ。」

「なんでもタチの悪いはぐれ妖らしくて相当の女すきで人間の女を襲つたりしてたらしいぞ。人間社会で問題おこしすぎて、ムリヤリこの学園にぶちこまれたらしい」

「こんなクズみてエな男よりオレの方がずっとマシっしょ？今から二人でどつかあそび行かない？」

そう言いながら、小宮はモカさんに顔を近づけたながら「な？ちよつとつきあつてよ」と言った流石に見過ごせなく間に割って入ろうとしたら。

「ごめんなさい！今つくねと遊んでるからっ」

とモノさんが言うとそのまま手を引つ張られてしまった。

「・・・フン見てろよオレはためエみてエない女逃しはしえねエ」

「ハアハア」

「ハアーびっくりしたねーちよつとコワかった。つくねは大丈夫？」

「あ・・・うん平気。モカさん・・・何でオレなんかと仲良くしてくれるの？オレ平凡で何のとりえもない奴なのに・・・」

ずつと麻婆神父の所に居たから女の人とろくに話した事ないしでも八極拳はとりえになるのかな？

「そんなっ・・・私にとっては平凡な人なんかじゃないよ。つくねは！」「えっ」

「そ・・・てれに・・・血を吸わせてもらった仲間なんだし♡」

えっそこそこなのモカさん・・・。

「自信持って！つくねの血は一級品だよ。今まで私が飲んだどの輸血パックの血よりおいしいもん！甘さもコクもミネラルバランスも完

壁!!あつでも少し辛かったような・・・?」

「食糧かオレはッ!!」

「じ・・・実はねその・・・は・・・はじめてだったんだよつくねがで」  
「へ?」

「つくねがはじめてだったの直に血を吸ったの」

「あのかんじ・・・忘れられないよ♡」

そんなはじめて要らないもつと別のはじめてが欲しいですモカさん。  
ん。

「モ・・・モカさん・・・」

「やだっ・・・何か恥ずかしい」

モカさんが何気なく伸ばしてきた手に嫌な予感がして1歩後に下がった。

すると横にあつた壁にモカさんの手が触れた場所が陥没した。

あ・・・危なかったあのまま押されてたら死んでたかも。

「遊ぼうよ学園探検しよ」

「う・・・うん」

その後オレとモカさんは学園中を探検した。

考える人っぽい銅像や奇抜な自動販売機など物珍しいものが沢山ありそんなモノを見ながらモカさんと談笑しながら学園中を巡った。

そんなまるでモカさんとデートしてる気分で幸せすぎてなんだか目まいがしてきたところ。

「見てつくね。ここがこれから生活する学生寮だつて!」

「寮?」

そこには、暗雲立ち込める中薄らと建っている建物があつた。

不気味だー!てゆうかいつの間にかこんな不気味な所につ!?

「こ・・・こんなところで三年間も生活するのかな・・・モカさん・・・」  
そう言いながら振り向くとどこかうつとりした顔をしたモカさんがいた。

「すてき・・・♡威厳と風格のある建物・・・」

「うそ!?趣味変わってない!?!」

「あれ?つくね苦手なの?妖怪のくせに。あ、そういえばつくねって

何の妖怪？」

に……人間なんですけど。バレたら殺されるバレたら殺される。

「え……いやそれは……」

「あ……正体バラすのって校則違反だったけごめんね今の質問ナシ」

「ははは、ははは」

あ……危なかったあく。

「そっそれ言ったらモカさんだって人間にしかみえないよ。本当にバ……バンパイアなの!？」

「……うんもちろん今は確かに人間ぽいけど……私ねこの胸のロザリオを外すと凶悪でコワ〜い本物のバンパイアになるんだよ」

ロザリオ……!？」

「ロザリオには私達バンパイアの

「力」を封印する効果があるの私はずっと争いとか嫌いだから自分からロザリオをつけてバンパイアの力を封印してるんだ」

本当かよ。モカさんてこんなにかわいくてやさしいのに……やっぱリオレとは違うのか……本当に人間じゃないのか!？」

「あつでも力を封印しても「血」は欲しくなっちゃうんだけどね」

「えっ……わモカさん……」

「すきあり♡」

はぷり。モカさんの顔に惚けているとまた血を吸われてしまった。「いってええええエエ」

n e x t   t i m e